

歴史は形を変えて繰り返す！歴史(戦略)に学ぶ企業経営

# 令和時代に渋沢栄一から学ぶ

## その2 「道德経済合一説」

- 前月号(その1)
- 1 令和時代と紙幣の刷新
  - 2 日本で必ずみえる顔
  - 3 「経営の神様」による評価

今月号(その2)

- 4 名言・格言から学ぶ
- 5 平成時代に求められた経営
- 6 令和時代に求められる経営



### 4 名言・格言から学ぶ

渋沢栄一の「責任」は、次の名言・格言からも読み取れます。  
「商売をする上で重要なものは、競争しながらでも道德を守ることだ。」  
「自分が手にする富が増えれば増えるほど、社会の助力を受けているのだから、その恩恵に報いるため、できるかぎり社会のために助力しなければならぬ。」  
以上の名言・格言を言わしめた渋



弁護士  
**曾我康久氏**  
●プロフィール(ソガ ヤスヒサ)  
「かなぐち経営法律事務所」所属  
事業承継ブロックコーディネーター  
大学及び大学院において、法律学  
にのみならず経済学の視点から会社  
法、独占禁止法及び下講法を研究。  
その観点から中小企業支援に注力し  
ている。

沢栄一の「責任」は、企業の目的が利潤の追求にあるとしても、その根底には道德が必要であるという考え方が「道德経済合一説」に由来します。その考え方を平易に言えば、企業経営者は、会社に利益を上げたならその利益を企業経営者のものにするだけではなく、社会に還元していくということです。

前月号の企業一覧表記載の企業は、明治時代から令和時代に至るまで、どれも国民経済のインフラとして欠かせない企業です。渋沢栄一が明治時代の日本国民に必要なとされたモノ・サービスを日本国民に提供する

ために、そのインフラを提供する企業を次から次へと起業する「シリヤル・アントレプレナー」(連続起業家)の道を推し進められたのは、まさに、企業の利益を社会に還元していく「道德経済合一説」から発生した「責任」が渋沢栄一にあったからです。その「責任」は、次のとおり、平成時代に求められた経営の反省の下で、令和時代に求められる経営への指針を示しています。

### 5 平成時代に求められた経営

高度経済成長期、安定成長期、そしてバブル経済期を経験した昭和時代は、日本経済自体が伸びており、その成長の恩恵を企業はあずかれました。その成長の恩恵だけ考えていくことから、自社の利益だけ考えていくことも、自社の成果が見込めたといえます。経済のパイが自然と増えていたことから、そのパイを自らの利益を追求して企業が奪い合っても、大部分の企業は増収増益を続けることができました。

その成長期の昭和の経営理念をそのまま引き継いできましたのが、平成時代に求められた経営でした。すなわち、バブル経済崩壊後、低成長

### 6 令和時代に求められる経営

期時代に突入した平成時代は、経済のパイの増加が不安定な経済状況です。にもかかわらず、平成時代に求められた経営は、相変わらず、自社の利益だけを見るあまり、自社の利益を追求する経営であったため、少なく残された木の実(経済のパイ)を企業が奪い合う状況となっていました。

令和時代に求められる経営は、木の実(経済のパイ)を奪うのではなく、全員に木の実(経済のパイ)が行き渡るように皆で新たな木を植え、育てる(経済のパイの拡大)経営です。目先の利益を追求するスタンスから視野を広げて、むしろ、他の企業や消費者と協力して、日本経済そのものを良くし、その経済のパイ自体を自ら拡大させる視点が企業には求められています。

逆に、平成時代に求められた経営を極端に追求(自社の利益だけを見るあまり目先の利益のみを追求)してしまっただけ企業は、欠陥製品リスク・契約リスクなどの社外要因リスクが企業の不祥事という形で突然、

表面化することで、会社自体の存立が危ぶまれることにもなります。その企業は、本来得られるべきであった少なく残された木の実(経済のパイ)すら得られせん。その不祥事を予防してトラブル・紛争に強い企業となるためには、企業の役員が一丸となって、渋沢栄一が追求した「責任」を自覚し、最終的には日本経済に貢献していくという目的を持って、社内外のルールに基づいた経営・法務リスクマネジメント(①リスク発生前の予防体制の構築、②リスク発生時の対応体制の構築、③事後検証)を実践していくことです。

現在、渋沢栄一の公益を追求した「責任」を思い出すためにも、新一万円札に渋沢栄一が選ばれた意味は非常に大きいと言えます。

歴史は、今を経営する者がより良い事業を展開するために、先人が遺してくれた経営の鑑(かた)でもあります。

\* 史実は諸説あります。本文とは異なる説もあつたことをご承知ください。  
\* インフラとはイメージです。